

● 研究論文

ニュージーランド保育関係者は2017年 テ・ファリキ改訂をどのように捉えたか

大橋節子 (環太平洋大学学長) 内田伸子 (お茶の水女子大学名誉教授)

上田敏丈 (名古屋市立大学准教授) 中原朋生 (環太平洋大学教授)

投
稿

要約

本研究では、2017年のニュージーランド（以下 NZ と表記する）保育カリキュラム「テ・ファリキ」改訂に注目し、NZ 保育関係者の改訂への受けとめ方を現地調査した。

調査の対象となった NZ 保育関係者は、概ね 2017 年改訂に肯定的な見解を述べた。その背景には、3つのポイントが存在した。① NZ 保育関係者が、1996 年に世界に先駆け幼保一元化や欧州系とマオリ系の二文化融合を果たしたテ・ファリキと、それに基づく 20 年以上の保育実践に誇りと自信を有していた。② 2017 年改訂が NZ 保育関係者の意向を尊重する形で、4つの原理と5つの要素といったテ・ファリキの基礎となる保育原理を全く変えなかった。③子どもの発達を見取る理論や評価基準を現代的に改善し、さらにスリム化を図り、保育現場におけるテ・ファリキの活用を容易にした。これらを背景に、調査の対象となった NZ 保育関係者は、2017 年版テ・ファリキを改訂 (Revision) というよりもリフレッシュ (Refresh) と捉えたことが明らかになった。

本稿では、テ・ファリキ作成者へのインタビュー、5つの保育施設の訪問調査による保育者へのインタビューを分析し、さらに、日本の保育への示唆を得ていく。

キーワード：ニュージーランド保育、テ・ファリキ、2017 改訂、保育関係者、インタビュー

1. 問題の所在

自然豊かなニュージーランド（以下 NZ と表記する）は、マオリ語で Aotearoa（アオテアロア）＝「白く長い雲たなびく地」と呼ばれる多文化共生の国である。南半球の小さな島国であるが、NZ 人の生き方はきわめて拘りがなくおおらかである。自然の懷に抱かれ「個人と家族の幸福」を確保しつつ守るべき事を大切に、先進的な取組み¹⁾を行っている。

その先進的な取組みの一つが、1996年に初めて策定された保育ナショナル・カリキュラム「テ・ファリキ」である²⁾。テ・ファリキは、世界に先駆け幼保一元化と欧州系とマオリ系の二文化融合を果たし、4つの原理と5つの要素を織物（テ・ファリキ）のように紡ぎ合わせる斬新な保育カリキュラム編成理論を打ち出した。

テ・ファリキは、OECD（2004）でも高く評価され、保育における5つの優れたカリキュラムのひとつとして紹介されている。その理念やラーニング・ストーリーといった記録の方法は、日本国内においても周知されている（七木田他 2015、大宮 2010 など）。

最初のテ・ファリキから約 20 年が立ち、2017 年にその改訂版が出版された。表 1 に改訂の要点を示した。

NZ 保育関係者は、2017 年の改訂をどのように捉えたのだろうか。本研究では、①テ・ファリキ作成者へ

のインタビュー、②5つの保育施設の訪問調査によるインタビューを分析し、上記の問題を明らかにし、③日本の保育への示唆を得る。

表1：テ・ファリキ 1996 年版と 2017 年版の比較

1996 年版 (英語 91 頁+マオリ語 8 頁)	2017 年版 (英語 69 頁+マオリ語 41 頁)
主な変更点 ○全体的に簡素な記述へ変更しつつ学びの成果を強調 ①学びの成果の明確化→118 項目から 20 項目に精選 ②ワイタンギ条約（二文化主義）の強化→多文化への対応 ③あらゆる子どものカリキュラム→インクルーシブ重視 ④カイアコ（先生）の責任の明確化→指導力重視 ⑤カリキュラムの基盤にある理論の明確化 →生態学モデル（ブロンフェンブレンナー） 社会文化的理論（ヴィゴツキー、ブルーナー） カウパパ・マオリ理論（マオリの教育論） 最新の脳科学の知見、等の明示	
共通点（変更なし） ○4つの原理と5つの要素を織り込む編成原理を堅持 ①4つの原理（Principle） ◇エンパワメント (Empowerment) ◇ホリスティックな発達 (Holistic development) ◇家族とコミュニティ (Family and community) ◇関係性 (Relationships) ②5つの要素 (Strands) ◇心身の健康 (Wellbeing) ◇帰属感 (Belonging) ◇貢献 (Contribution) ◇コミュニケーション (Communication) ◇探究 (Exploration)	

（新旧テ・ファリキを比較し筆者作成）

2. 調査 A: テ・ファリキ作成者へのインタビュー

(1) 方法

インタビュー調査として、Rosina Merry 博士に研究協力依頼した。Merry 博士は、テ・ファリキ 2017 の改訂にも関わっており、ワイカト大学教育学部のシニアレクチャラーであった。インタビュー時は、Early childhood New Zealand のディレクターである。

インタビューは、2018 年 5 月 1 日に筆者等と Merry 博士及び Early childhood New Zealand³⁾ の関係者として約 2 時間実施された。本調査を行うにあたり、研究協力者には、事前に研究目的とインタビューの内容を伝えた上で、同意を得ている。

(2) 結果と考察

①テ・ファリキ改訂に至るまで

テ・ファリキの改訂は、2015 年に教育省から改訂の指示がなされ、2016 年 11 月 4 日に草案が発表され、約 6 週間の協議期間の後、2017 年に発表された (Ministry of education 2015, 2017)。

テ・ファリキ 2017 年版には、今回の改訂について「今日の NZ 社会の多様性や教えることの理論の変化、幼児教育の文脈の変化を受けたもの」とある。この点について、Merry 博士は、教育という視点に対して政府の方針の変化が大きいと述べている。

当時、政府が捉える教育の視点としては、「テ・ファリキはもっと明確な評価、アセスメントを行うべきだ」ということであった。そして、「読み書き、算数をもっと重視するべきだ」という風に捉えていると私は見ていた。…(略)…結局、適切なかたちで様々な協議が行われた結果として、政府の思っていたようなアセスメント重視型、算数重視型というものではなく、非常に優れた文章が出来上がったという流れとなった。

協議期間が 6 週間と非常に短い期間ではあったが、「大きな仕事をする時はこれくらい短い時間でやったほうがいい」とも述べており、短期間での改訂についても評価している。また、内容も原則引き継がれているため、Merry 博士は今回の改訂 Revision ではなく Refresh であると述べていた。

②改訂のポイントについて

テ・ファリキの改訂版のポイントは (Ministry of education 2017)、これまでのテ・ファリキの原理や要素といった基本的な考え方は踏襲されつつ、「具体例や示唆の改訂」「多文化主義やインクルージョンの強化」「学びの到達点の明確化と精選」「マオリ語のカリキュラムとの関連づけ」「構造の簡素化」が挙げられている。特に、学びの到達点の明確化と精選について

は、1996 年版では 118 あったものが 20 へと減っている。この点について、Merry 博士は次の様に述べる。

元々、アウトカムは非常に多く、その内容も示唆的なもので、教育する側としても、かなりマネジメントがしにくいものであったという背景がある。それをリフレッシュさせて、焦点を新たに定めることによって、それぞれのアウトカムの価値が上がってきたと思う。それと、そのアウトカムが子どもの発達にマッチする形になったと思う。

また、同席した元幼稚園園長⁴⁾は、この学びの到達点の精選について次のように述べている。

完成版は以前のものより、もっと纏まりがあるものであって、使いやすい書類であることと同時に、何が必要なのかということが、より明確に書かれた、より使いやすい書類になっていた。それに加え学習のアウトカム等もしっかりと関連付けられる内容になっていて、元々優れていると思われていた考え方や様々な流れというのは前と全く変わっていないのだと分かった。

このように、今回の改訂における変更点を Merry 博士と同席した元幼稚園園長は概ね好意的に受け止めていた。さらにこの改訂の背景に影響を与えている理論として、Merry 博士は 2 つの点をあげている。

ひとつは、1996 版もそうであるが、ブロンフェン布伦ナーの生態学的システム理論がある。特に、このシステムに対して、「人間の発達に対する時間の影響」を認識し、重要な点として位置づけていた。

もうひとつは、脳神経学の知見であり、特に乳児の発達や学びの特徴、遊びの大切さ等が明らかになったので、乳児からの学びを組み込んでいる。

③テ・ファリキ 2017 年版に対して

上述したように、改訂されたテ・ファリキについて、Merry 博士や同席した元幼稚園園長は、肯定的に受け止めている。それは、テ・ファリキが 1996 年版の理念を引き継いでいるためと考えられるが、1996 年版から 2017 年版に通底するテ・ファリキの理念に対しては、どのように捉えているのか。Merry 博士は、1996 年版テ・ファリキができる前と後を比べて次の様に述べている。

(テ・ファリキができる前は)子どもに何ができるのかというチェックリストがあって、小学校に入学する前に、「これはできるようになりました」というのをチェックするという赤字のアプローチ。…(略)…それを、赤字の部分を観るのではなく、クレジット、黒字の部分を見て、アウトカムでまだ達成しなくてはならないことがあるのだったならば、それができるようにサポートしていく。

1996年版から2017年版に通底するNZ保育の理念はホリスティック・アプローチである。それは、1996年版テ・ファリキ以前の「赤字評価主義 (Deficit approach)」から「黒字評価主義 (Credit approach)」への転換であり、子どもの達成度をみるのではなく、形成的評価を行うことと述べている。

その上で、2017年の改訂を踏まえ、個々人の評価を行うだけでなく、グループでの学びや育ちを見ていくことが再確認されたという認識であった。

(3) 調査Aのまとめ

NZにおけるテ・ファリキの改訂に対して、改訂に関わった研究者視点では、これまでの理念を引きつぎ、時代のニーズや学術的知見を踏まえ、保育現場との対話の中でつくり出されたものという認識であり、改訂 (Revision) というよりもリフレッシュ (Refresh) という用語が相応しいことが明らかになった。

3. 調査B：保育施設訪問調査インタビュー

(1) 方法

保育施設訪問調査では、NZにおける5つの保育施設に訪問し、園長または主任クラスの責任者へのインタビューと保育観察を実施した。5つの園の選定にあたっては、NZ教育評価局による最新の評価が優れている(4段階評価の3以上の)施設を標準的な施設とし選定し、研究の趣旨に賛同の園に訪問した。

訪問調査の概要は表2の通りである。調査は、2018年4月30日から5月3日に実施され、インタビューと保育参観を行った。なお、本調査を行うにあたり、研究協力者には、事前に研究目的を伝え、同意を得た。インタビューは多岐に渡ったが、各園共通事項として、入園児の概要、主な保育理念、テ・ファリキの活用状況、新テ・ファリキへの意見、ラーニング・ストーリーの運用状況、保育の特徴、特徴的な取り組み等について質問した。

(2) 結果と考察

本節では、主にテ・ファリキの活用状況と改訂について各園の見解をまとめる。

テ・ファリキの活用状況については、旧版から変化していない4つの原理(エンパワメント、ホリスティックな発達、家族とコミュニティ、関係性)と5つの要素(心身の健康、帰属感、貢献、コミュニケーション、探究)を各園が理念や実情に合わせてアレンジし活用していた。例えば、A園では「探究的学習、探検」「社

表2：ニュージーランド保育訪問調査施設の概要

園(許認可タイプ)	A園 (Free Kindergarten)	B園 (Education & Care Service)	C園 (Education & Care Service)	D園 (Education & Care Service)	E園 (Education & Care Service)
調査日時	2018. 4. 30. 9:00~11:30	2018. 4. 30. 14:00~15:30	2018. 5. 1. 14:00~15:30	2018. 5. 3. 10:00~12:30	2018. 5. 3. 13:00~14:30
入園児概要	2歳~就学前40名	0歳~就学前 2歳未満12名 2歳以上44名	0歳~就学前 2歳未満8名 2歳以上42名	0歳~就学前 2歳未満20名 2歳以上46名	0歳~就学前 2歳未満22名 2歳以上44名
民族構成	欧州系中心	欧州系とマオリ系	欧州系とマオリ系に加え複数の民族	欧州系とマオリ系	欧州系とマオリ系に加え13ヶ国
保育理念	トピック学習	文化融合と尊敬(ワイタンギ条約)	持続可能な未来のためのエコ重視	レジャ・エミリア・アプローチ	発見と学びの保育
テ・ファリキの活用状況と意見	新テ・ファリキも基本原理や柱に変化はない。本園ではテ・ファリキに基づく「探究的学習、探検」「社会的コンピテンス」「家族と地域への強固な所属感」「人間と価値の尊重」4つのミッションによる保育を実践している。	新テ・ファリキはスリム化され、ポイントを押さえることができる。ホリスティックな捉え方は園の考え方に一致。先祖や伝統とのつながりを大切にするマオリの考え方にマッチする。	新テ・ファリキは、評価項目が大幅に減って、現代社会にマッチする。教育目標と活動・遊びの対応が見えやすく、LSが書きやすくなった。マオリ文化の尊重は維持され園の方針であるダイバーシティを推進できる。	新テ・ファリキは、最新の科学的知見や発達理論を導入し実践に活かす方針が明確化した。マオリのキー概念Manaとも調和している。評価項目が20に縮減され評価しやすい。各園の自律性を重視し園の特長もアピールできる。幼小接続も明確になった。	新テ・ファリキの解釈は各園・保育者に任されている。インクルーシブ保育の視点が入ったのは良い。旧版は詳細かつ20年馴染んでおり書きやすかった。新版で失われたものもある。
特記事項	森探検プロジェクト 実習生とボランティアの積極的受入	マオリ式の歓迎式 園庭でのお昼寝保育 ダイバーシティ推進	エコのため布オムツ 平和教育の推進 尊重 (Respect) 重視	環境構成重視 園全体がアート空間 コーナー遊び重視	テ・ファリキ遵守 アタッチメント重視 自律性を尊重

(保育施設訪問調査に基づき筆者作成)

会的コンピテンス」「家族と地域への強固な所属感」「人間と価値の尊重」の4つの理念を掲げ、そのプロセスを示す壁面構成を作成し、子ども、保育者、保護者の共通理解のもとで保育が展開されるように工夫されていた。

テ・ファリキの改訂について、訪問調査した5つの園の責任者は概ね好意的に受けとめていた。例えば、B園の園長は次のように評価した。

評価項目が大幅に減って、現代社会にマッチするものへと改善されたので助かっている。

教育目標 (Mission) と活動・遊び (Vision) の対応が付きやすくなり、ラーニング・ストーリー (Learning story「学びの物語」) が書きやすくなった。「マオリ文化の尊重」は維持されているので、マオリ人が多いこの保育園の特徴をアピールしやすくなり、本園の方針であるダイバーシティ推進を後押ししてくれるものに改善された。

と高く評価していた。

また、D園の主任は、「私は何事も新しいものが好きなタイプ」と述べた上で、次のように評価した。

新テ・ファリキは科学的知見や発達理論を取り入れて、現代の子どもの育ちの状況にマッチするようにリフレッシュされたのはとても良い。理論がしっかり書き込まれただけでなく、コンセプトを解きほぐして実践に活かそうという方針が明確になった。またマオリのキー概念であるマナ (Mana; 神秘的な力の源) との関連が明確になった。

新テ・ファリキでは評価項目が20に縮小され、現場では評価しやすくなったと思う。各園の自律性を大事にしてくれるので評価軸も多様になり、個々の保育園の特徴を打ち出しアピールするよう奨励されるのはとても良い。小学校への接続もスムーズになる工夫がなされた。

以上のように、テ・ファリキの改訂は概ね好意的に捉えられているが、従来の緻密な評価項目が大綱化されたことへの不満も1件見られた。E園は、比較的テ・ファリキに準拠した保育が実践されている。同園は単元開発の研究機関としての役割も担っているため、園独自のプログラムを開発し、試行実施して効果の査定もしている。E園の園長は、テ・ファリキの改訂については好意的に評価した。下線を施した見解も付言した。

テ・ファリキの解釈は各園、各教師の裁量に任されている。国は各園の主体性を大事にして

くれるのでありがたい。リフレッシュ版 テ・ファリキに「インクルーシブ保育」の概念が盛り込まれたのは、時代の変化に対応していると高く評価できる点だ。しかし、テ・ファリキを改訂したことで失ったものもある。保育者は改訂前のテ・ファリキに過去20年間も馴染んできたので、書きやすかった。

この付言はリフレッシュへの批判ということではなく、研究機関附属施設として単元開発の役割も担っている保育園であり、行政のリフレッシュを無批判に受け入れることはしないという自負と自信の現れではないかと推察される。

以上のように保育園によりニュアンスの違いはあるが、テ・ファリキの改訂は概ね好意的に受けとめられていた。

(3) 調査Bのまとめ

インタビューを踏まえ、2017年の改訂に関して、保育者が概ね肯定的な見解を述べた背景を考察する。まず、今回調査したNZ保育関係者は、①1996年に世界に先駆け幼保一元化や欧州系とマオリ系の二文化融合を果たしたテ・ファリキとそれに基づく20年以上の保育実践に誇りと自信を有していた。さらに、②2017年の改訂が4つの原理と5つの要素といったテ・ファリキの基礎となる編成原理を全く変えなかった。その上で、③子どもの発達を見取る理論や評価基準を現代的にリフレッシュし、現実の保育におけるテ・ファリキの活用を容易にした。この3点が、2017年版改訂に対する高評価の基盤となっていた。

4. 総括的討論

(1) 本調査から得られた日本の保育への示唆

日本でも、3大臣 (内閣総理大臣・文部科学大臣・厚生労働大臣) の告示を受けて、2017年に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂された。主要な改訂点は(1) 幼保一元化 (幼児教育を担う施設として、子ども一人ひとりの発達過程や状況にあわせて環境を設定し援助やことばかけを工夫する子ども中心主義保育・教育を明確に共通化)、(2) カリキュラム・マネジメント (PDCAサイクルの実質的な循環)、(3) 幼小のスムーズな接続 (0歳児のエデュケア<養護と教育>から幼児期の終わりまでに育てたい10の力の整理) である。この改善点と比較対照しながら、NZ保育調査から得られる示唆について考察を進める。

① 幼保一元化

NZの幼児教育施設は、家族のニーズに応じて多様なサービス (全日滞在型、半日<午前・午後>滞在型、

親子のプレイグループ参加型など（七木田 2015）がある。どこに通うかは保護者に任されている。20 年前から幼保一元化がはかられ、テ・ファリキに則った保育実践が行われている。

日本は、3 大臣告示後、保育内容の一元化が図られた。実質的な一元化は保育実践現場に任せられ、実質的な一元化には時間がかかると思われる。一元化に成功した NZ 保育に学びたい。

②保育記録について

NZ の保育記録「ラーニング・ストーリー（学びの物語）」は、テ・ファリキの 4 つの原理に対応させて子どもの学びの物語を作成する。子どもの発達過程や状況を理解した上で、テ・ファリキと比較対照しながら、子ども理解と環境設定の工夫や改善、子ども一人ひとりの発達に即した保育の援助の方針を立てるなどの評価機能を果たしている。

保育者、保護者、子ども、さらに参観者も壁に貼りだされたラーニング・ストーリーを見て、振り返ることができる。

週に 1, 2 度（1 回 1 時間程度）のスタッフミーティング（保育カンファレンス）により、保育の質の向上に努めている。

日本の保育記録は、実践したことの記録や日誌であり、保護者への連絡帳に留まっているところも多い。表 2 の（2）のように「カリキュラム・マネジメント」が掲げられたが、中身は詰められていないため現場には戸惑いの声があがっている。保育記録に何を盛り込むか、何のための記録かを明確にして、保育力の質向上をはかることが課題となる。

③保育の評価

Merry 博士のインタビューにもあったように、NZ では形成評価（formative evaluation）により日々の保

育を改善している。テ・ファリキの改訂により子どもの評価観点が 118 項目から 20 項目へと減った。調査対象園の保育者たちは、評価項目数の削減を歓迎している。また今回調査した NZ 保育者は、1996 年版から 2017 年版に通底する「成長した点を認める黒字評価主義（Credit approach）」を堅持したことも歓迎している。

日本の保育評価は実践したことの記録にとどまっている。教育の PDCA のよい循環をはかることで、評価をしつつ保育の改善をはかることが明示された。チェック（C）は、NZ の保育のように、子どもの達成度を評価するのではなく、保育改善をするための形成的評価（formative evaluation）によって保育の改善と質向上の契機とすべきである。

自治体による第三者評価も問題が大きい。評価担当の有識者が、乳幼児保育について無理解のため、見当はずれの評価（例：「保育園も幼稚園のように文字の読み書きや計算の基礎を教えてはどうか」「保育園も幼稚園のように教育していただきたい」など）がなされ、実践現場は対応に苦労している。

NZ 調査の D 園の園長の回答「各園の自律性を大事にしてくれるので評価軸も多様になり、個々の保育園の特徴を打ち出しアピールするよう奨励されるのはとても良い。」に見られるように、日本でも各園の自律性を尊重して、よい実践を認め、現場が保育の改善をめざして努力する気になるように励ます評価へと舵を切るべきである。

（2）NZ の保育原理と日本の保育との共通性

テ・ファリキに基づくニュージーランドの子どもの主体的な遊びを大事にする保育は、日本の要領・指針における子ども中心の保育と共通している。テ・ファリキの保育原理は、ブロンフェン布伦ナーの生態学

表3：幼稚園教育要領、保育所指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の主な改善点

(1) 幼保一元化 ・ 幼稚園、保育所、こども園すべてが幼児教育を行う施設として位置付けられる
(2) カリキュラム・マネジメントのよい循環を図る ・ 全体的な（包括的で大まかな）計画（P）に基づき、環境を構成し教育・保育を実践する（D）、子ども一人ひとりの育ちを評価して改善点を可視化し（C）実践を改善する（A）というカリキュラム・マネジメントを実質的に循環させる。
(3) 幼小のスムーズな接続 ・ 0 歳児に 5 領域を背景にした 3 視点を新設 ・ 幼児の終わりまでに育って欲しい姿の明確化（10 の育ちの 46 細目、5 領域で活動例が明示化、認知と非認知の連携協働） ・ 小学校へのスムーズな接続（学習指導要領の 3 つの柱を幼児教育にも導入）

（筆者作成）

的システム理論⁵⁾を基盤にしている。一方、日本は、倉橋惣三の保育論を基盤にしている。依って立つ保育原理は違っているが、どちらも子どもの主体的な遊びを大事に、保育者は子どもの遊びをわきから支える役割をとることが求められる。共通しているのは以下の3点である。第1に、活動の主体・主人公は子どもである。第2に、保育者は活動が生まれ展開しやすいように意図をもって環境を構成する。第3に、活動を豊かにすることは、いろいろなことをできるようにすることと同じではない。重要なのは、活動の過程で乳幼児自身がどれだけ遊び、充実感や満足感を得ているかであり、活動の結果どれだけのことのできるようになったか、何ができたかだけを捉えてはならない(内田 1988, 倉橋 2002, 七木田他 2014)。

乳幼児保育・教育は教育の原点である。人が生涯学び続ける基盤を構築する段階である。常に子どもがステークホルダーとなるよう、保育者は、子どもの視点に立ち、子どもの利益を最大にするため一人ひとりの子どもの発達状況や発達過程にあわせて環境を構成し、援助やことばかけを工夫する「適応的エキスパート(Adaptive expert)」(内田 2017)でなくてはならない。

5. 結語

本研究では、2017年版テ・ファリキをNZ保育関係者がどう捉えたか考察した。2017年版は、当初、学習面を強調する意向であったNZ教育省に対して、保育関係者が修正意見を出し、1996年版の基本原則を堅持しつつ、最新の理論を踏まえて大綱化したものとなった。その結果、2017年版は「原点を守りつつ、リフレッシュされたカリキュラム」として、調査したNZ保育関係者は概ね好意的に評価していた。

日本では、保育士不足が深刻な社会問題となり、待機児童問題が取り沙汰されるなか、保育園建設についても賛否両論があるなど、「次代を担う子ども達」の育成をおざなりにしているとも言えよう。子どもの育ちを通し、私たち自身が考え方を学び直す、大きな改革を求められているのである。保育ナショナル・カリキュラムであるテ・ファリキの改訂を、保育に携わる保育者の現場感覚を重要視し実施したNZという小さな政府の保育政策にこれからも着目していきたい。

〈引用文献〉

- 内田伸子, 1986『まごころの保育～堀合文子の言葉と実践に学ぶ～』小学館。
 内田伸子, 2017『発達の心理～ことばの獲得と学び～』サイエンス社。
 大宮勇雄, 2010『学びの物語の保育実践』ひとなる書房。
 倉橋惣三, 2002『育ての心<上><下>』(倉橋惣三文庫)フレーベル館。
 鈴木佐喜子, 2018「ニュージーランドにおける保育カリキュラム『テ・ファリキ』の改定と改定作業プロセス」『保育学研究』第56号第2号。
 七木田敦・ジュディス・ダンカン〔編著〕『「子育て先進国」NZの保育～歴史と文化が紡ぐ家族支援と幼児教育～』福村出版。
 Ministry of education 2015 report of the advisory group of early learning, New Zealand Government
 Ministry of education 2017 update of Te Whariki: report on the engagement process, New Zealand Government
 OECD 2004 Starting strong curricula and pedagogies in early childhood education and care: Five curriculum outlines, OECD

〈注〉

- 1) 例えばNZでは、1893年に世界初の女性参政権が認められ、1919年には被選挙権が認められている。テ・ファリキの導入の根底には、ジェンダー・フリー教育が整っているからこそ「社会の宝としての子ども達」という考え方も定着していると言えよう。
- 2) NZはテ・ファリキ導入以前の1990年には333万人の人口であったが現在469.3万人と当時の1.4倍となっている。翻って日本は、同じ年限で比較をしても、減少する一方である。出生率も2015年においては、1.99人のニュージーランドに対して日本では1.46人である。
- 3) Early Childhood New Zealandは、ニュージーランドの保育の質向上のために、1963年に設立された団体であり、保育士への研修や保育士資格の認定など行なっている。
- 4) インタビューには、ECNZのスタッフとして元幼稚園園長2名も同席していた。インタビューはMenny博士を中心に行なったが、実践現場での受け止めについては、Menny博士が元幼稚園園長に発言を求めたため、本論文でも引用している。
- 5) 「Bronfenbrennerの生態学的システム理論(ecological systems theory)」ユリー・Bronfenbrenner(Urie Bronfenbrenner)によって提唱された理論で、「社会文脈における発達理論」とも「人間の生態学理論」とも呼ばれる。システム内およびシステム間で相互作用する入れ子構造になった4種類の環境システムについて述べている。Bronfenbrennerの主要な主張は、「人間発達の生態学」であり、1979年の出版『生態学的心理学』以来、心理学者とそれ以外の人々が、人間とその環境にアプローチする方法に広く影響を与えている。発達の概念化により、これらの環境(家族から、文化的・社会的・歴史的・経済的・政治的構造までを指す)が、幼児期から成人まで生涯にわたる発達の重要部分とする見方をもたらしている。

〈謝辞〉

今回の調査にご協力いただいたRosina Merry博士をはじめとするNZ保育関係者及び国際大学IPU New Zealandスタッフに感謝申し上げます。

〈付記〉

本研究はJSPS科研費18K02469の助成を受け研究成果の一部を公表するものである。